長岡市内遺跡発掘調査報告書

舞台B遺跡
徳平遺跡
下道遺跡

1996

長岡市教育委員会

序

長岡市教育委員会は、昭和62年から国及び新潟県からの補助金の交付を受けて、開発との協議の資料作りを目的とした遺跡の確認（試掘）調査を行ってきました。本事業を始めたころの遺跡数は約200ヵ所でしたが、その後の新潟県教育委員会の遺跡の詳細分布調査などで、現在では380ヵ所を越えるまでに発見されています。遺跡は、古墳や山城跡などを除いては、土中に埋もれていることが多い文化財（埋蔵文化財）です。このため、発掘するまで遺跡の規模や内容等が不明なことが多いという性格をもっています。また、遺跡の存在すら分からないこともあります。

今年度に確認調査を行いました3遺跡のうち、中世の古銭が1万枚も出土しました下道遺跡は、これまで遺跡として知られていなかったところで、水田の暗渠排水路工事中に発見された遺跡です。幸いにして工事関係者の皆さんのお陰で、緊急に発掘調査を行うことができました。大地の表面からうかがい知ることができにくい、埋蔵文化財がもつ性格の一面を教えられた遺跡です。また、舞台B遺跡と徳平遺跡は、逆に周知の遺跡でしたが、確認調査から開発予定地は遺跡から外れていることが分かりました。

長岡市教育委員会は、今年度の調査の成果を過去のものとせず、これからも私たちの先祖が営々として築き、残してきました遺跡としての文化財を保護するために、遺漏の無いように努力を続ける所存です。今後とも多くの皆様方の御協力をお願いする次第です。

最後に当たり、調査に格段の御指導、御協力を賜りました文化庁、新潟県教育委員会、長岡市農業協同組合、株式会社吉原組をはじめ、関係各位に衷心よりお礼を申し上げます。

平成8年3月28日

長岡市教育委員会
教育長　大西厚生

例言

1　本書は、平成7年度に実施した長岡市内遺跡発掘調査の記録である。
2　調査の経費は、長岡市一般財源のほか、国庫補助金及び県支出金の交付を受けた。
3　調査は、長岡市教育委員会が主体となって実施した。
4　文化財保護法上の発掘担当者は、舞台B遺跡・下道遺跡は駒形敏朗、徳平遺跡は小林伸治である。
5　本書の作成は、各遺跡の発掘担当者が執筆し、全体を駒形がまとめた。
6　発掘調査の記録写真・図面及び出土品は、長岡市教育委員会が保管している。

目次

1　舞台B遺跡 …… 1
2　徳平遺跡 …… 5
3　下道遺跡 …… 9
4　おわりに …… 31
調査体制 …… 31

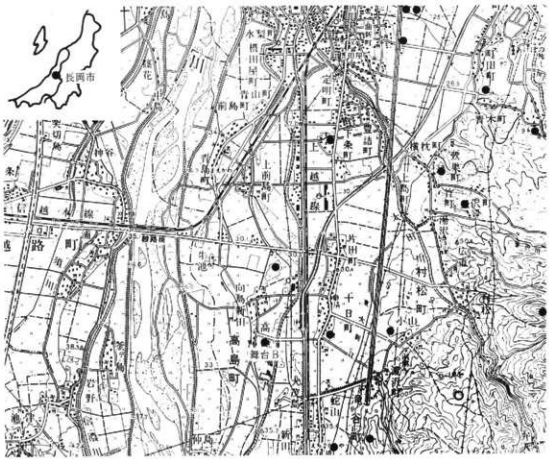
1　舞台B遺跡（第1図～第5図）

所在地　長岡市高島町字舞台39番地外

立　地（第1図・第2図）　舞台B遺跡は、信濃川右岸の沖積地にある中世の遺跡で、信濃川から約1kmほどのところに位置している。信濃川寄りの西側には、高島町の集落が立ち並ぶ自然堤防が南北に伸びている。標高は約32m、地目は畑。今回の確認調査の対象地の地目は水田で、畑との高低差は50cm～1mである。なお、遺跡の発見は、平成5年度に行われた新潟県教育委員会の遺跡詳細分布調査による。

信濃川右岸の沖積地には、高山城跡、白倉館跡、下ノ坪遺跡など、丘陵沿いには鷲巣城跡、糠塚（経塚）など、中世の遺跡が多数分布している（第1図）。

調査に至るまで　平成7年3月末に、砂利採取法第16条の規定による認可申請の照会が、長岡市環境調整室（当時）を経由して新潟県長岡土木事務所から長岡市教育委員会に寄せられ、舞台B遺跡で砂利採取が計画されていることを知る。ただちに「計画地に舞台B遺跡が所在するので、遺跡の保護について協議を行いたい」旨を新潟県長岡土木事務所に回答するとともに、申請者との協議に入る。申請者との協議において、発掘調査は時間と経費がかかるので、できれば計画の変更することを要望する。申請者からは、土地所有者と借地契約もまとまっており、事業計画の変更は難しいことなどが出された。協議の結果、事業実施の時期が迫っていること、計画地が珠洲焼等の中世陶磁器が採集された畑地の西から南側に広がる水田を対象にしていることなどから、遺跡確認調査を行い、その内容によって遺跡の保存方法を協議することになった。



第1図　舞台B遺跡位置図及び中世遺跡群（1/50000、長岡）

調　査（4月11日～14日）　調査は、4月11日に調査に必要な機材を調査地に搬入し、13日から確認調査に入った。砂利採取計画地の水田を対象に、養鯉池等を除いた水田の区画（1反歩＝1000㎡）に4×4mのグリットを3カ所設定することを原則に、合計43カ所でバックフォーと人力による発掘を行った。発掘期間は2日間、発掘面積は合計704㎡。

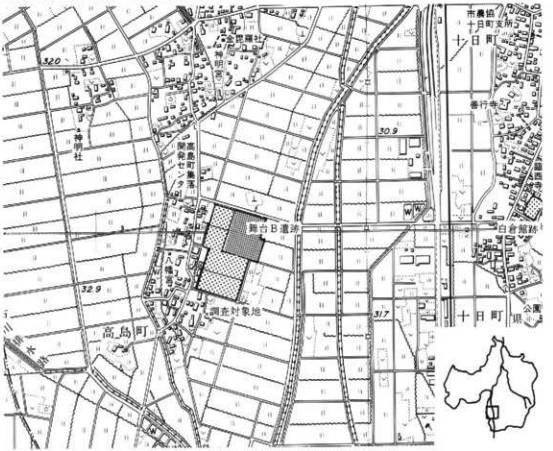
第2図　採集珠洲焼（1/2）

調査の結果　砂利採取計画地の水田からは、遺構や遺物は発見されず、かつ地山の黄褐色土や青灰色粘土までの表土ー水田耕作土の堆積が10cmと薄い。このことから、砂利採取計画地に、遺跡は所在しないと判断される。

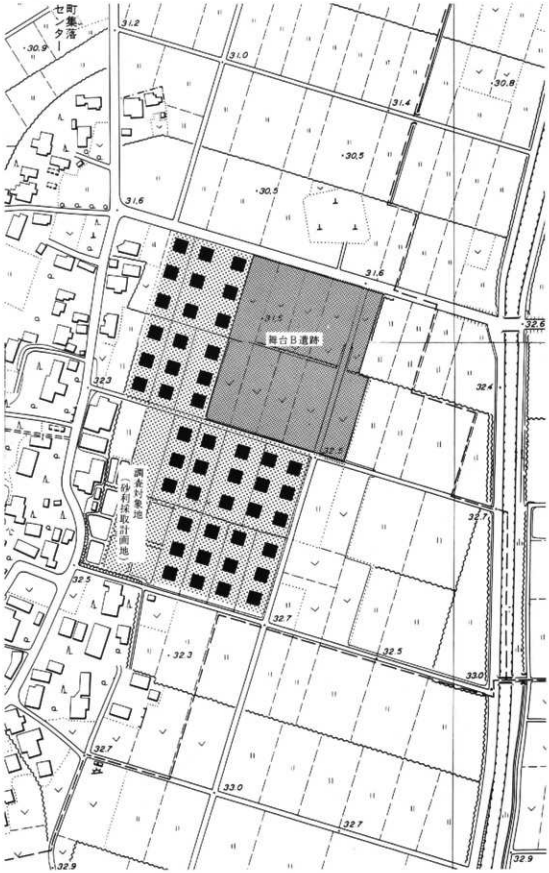
遺物（第4図）　ここに図示した遺物は、平成5年度の新潟県教育委員会による遺跡の詳細分布調査の際に、舞台B遺跡の畑から採集されたものである。採集された遺物は、内面に数条の摺目が見られる珠洲焼の摺鉢の破片である。採集遺物は、この他に1点、越前系の甕の小破片がある。

まとめ　砂利採取計画に伴う舞台B遺跡の確認調査の結果、調査対象地の水田には遺跡は広がっていないことを確認した。この結果に基づいて、砂利採取申請者に「計画地には遺跡は存在しない、事業計画を進めても差し支えない」ことを口頭で伝えた。

また、舞台B遺跡の範囲は、前に珠洲焼の摺鉢が採集された畑が、確認調査を行った水田より一段高いことなどから、畑と道路北側の墓地にかけて広がっている可能性が高いと考えられる。これは、少量ながら遺物が採集されたことと地形から判断したものである。だが、確認調査の期間中にも畑の周辺で遺物の採集活動を行ったが、1点の遺物も採集できなかった。将来、畑の部分で地形の変更を伴う開発が計画された段階で、改めて遺跡の存在を確認したい。



第3図　舞台B遺跡周辺の地形図（1/10000）



第4図　調査グリット図（1/2500）

遠景

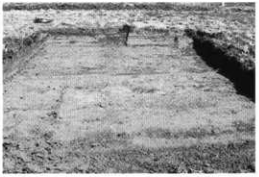
近景

バックフォーでの発掘

遺構確認作業

埋め戻し作業（バックフォーによる）

埋め戻し作業（人力による水田面復旧）



発掘後のグリット

発掘後のグリット

第5図　舞台B遺跡確認調査の写真

2　徳平遺跡（第６図～第11図）

所在地　長岡市王番田町字徳平789～795

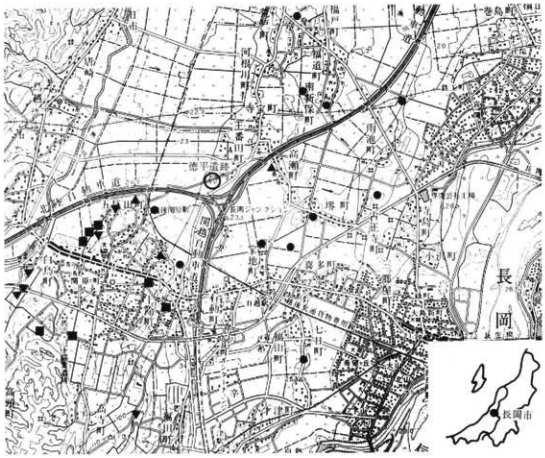
立　地（第６図・第８図）　関越・北陸自動車道の長岡ジャンクションの北側で信濃川左岸の沖積地に立地する。標高21～22ｍ、ほぼ平坦な地形を呈する。徳平遺跡は、平成４年度の新潟県教育委員会の遺跡詳細分布調査で須恵器片が採集され、新しく発見された遺跡である。調査地は、昭和27～28年ころにかけて区画整理が実施された水田が広がり、北西部には区画整理時に水田を埋め立てた畑地がある。

周辺には古代の遺跡が所在しているが、そのほとんどが平成４年度の分布調査で新しく発見された遺跡である。

調査に至るまで　遺跡周辺の水田に１反の耕作面積を１haにする信濃川左岸西部地区圃場整備事業が計画されたため、遺跡の範囲、遺物包含層の深度等内容を確認する調査を行うことになった。

調　査（10月２日～10月６日）　畑地は周辺より少し高く、分布調査で須恵器片が採集された。このため、畑地を中心に調査グリットを設定しバックフォーを使用して発掘を行った。調査グリットは、２×３ｍのグリットを41カ所設定する（第９図）。調査面積は246㎡。

なお、水田部分のグリットの埋め戻しには、砂を入れて転圧し、次年度の耕作に支障をきたさないように水田の修復をはかった。



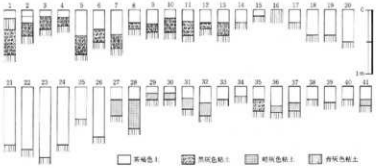
第６図　調査地位置図（1/50000　長岡）
（■縄文　●古代（奈良・平安）　▲城館跡　▼塚）

調査の結果　8Gから須恵器の坏の破片、12Gから須恵器の甕の破片の計2点出土した。ほかに遺構・遺物とも発見されなかった。

土層序（第7図）　基本的な土層序は、茶褐色土（耕作土・Ⅰ層）、黒灰色粘土（Ⅱ層）、暗灰色粘土（Ⅲ層）、青灰色粘土（地山・Ⅳ層）である。12GのⅡ層から須恵器片が出土したが、その他のグリットから木片、籾殻、炭などの出土があり、土層の堆積も安定していないことからⅡ層は遺物包含層とは考えにくい。

なお、調査地の北側の畑地を中心とした14～27Gは、耕作土（Ⅰ層）と地山（Ⅲ層）のみであり、耕作土の堆積が厚く、遺物包含層が見られなかった。

遺物（第10図）　須恵器の甕の破片が12GのⅡ層から出土した。甕の体部破片で外面には格子タタキ目、内面には平行タタキ目が施されている。時期は、奈良～平安時代のものと思われる。また、8Gの排土中から須恵器の坏の口縁部の小破片が出土し、計須恵器片が2点出土した。

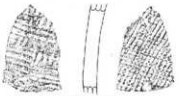


第7図　土層柱状図

第8図　調査地周辺の地形図（1/10000）

第9図　調査グリット図（1/2500）

まとめ　調査の結果、遺構がないこと、出土遺物が須恵器の破片が2点であること、土層の観察から遺物包含層がないこと、分布調査で須恵器片が採集された畑地が昭和27年～28年の区画整理で水田を埋め立てられてつくられたことが土層の観察から裏付けられたこと。以上のことから今回の圃場整備事業計画地内には遺跡が所在しないことが確認された。また、出土した土器は、昭和27年～28年の区画整理の際に他の地域からの流入と考えられるが、どこから運ばれたのかは不明である。



第10図　出土土器（S＝1/3）

なお、今回の調査対象地は圃場整備では、畑地は現状のままで、水田部分については盛土工法で実施されることになった。

調査地遠景（南から）

調査地近景（南西から）

12G　完掘状況（西から）

須恵器出土状況（12G）

水田部埋め戻し状況（4G）

32G　完掘状況（東から）

第11図　徳平遺跡確認調査の写真

3　下道遺跡（第12図～第31図）

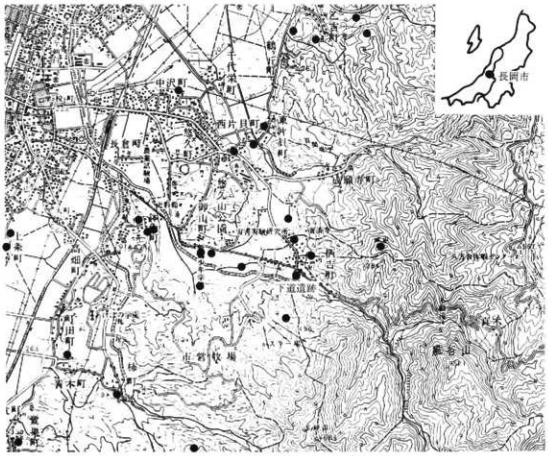
所在地　長岡市栖吉町字下道3259番地（仮地番）

立　地（第12・13・15図）　市街地の東には、通称「東山」と呼ばれる丘陵が南北に連なっている。遺跡は、東山から信濃川に流れ出る栖吉川の右岸で、東山の谷口扇状地が開けたところに立地する。下道遺跡の南には栖吉川を隔てて三ノ峠山の尾根が迫り、北には栖吉城跡に続く山裾が迫り出しており、遺跡が所在する地形は、南北の丘陵尾根に挟まれた沢状を呈している。標高約84m、地目は水田である。

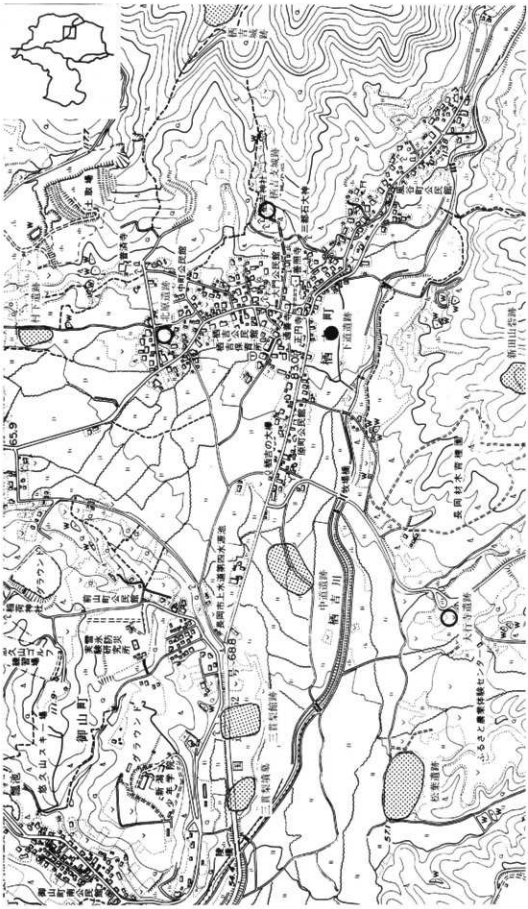
栖吉地区には、古志長尾氏が15世紀末から16世紀初めに築いた栖吉城跡を中心に、多数の中世遺跡が存在する。栖吉川流域には、15世紀代の三貫梨墳墓（駒形・他　1986）、同時期の寺院跡の可能性が高い三貫梨館跡（駒形　1987）、「文明」（1469～1487年）の墨書木片が出土した松葉遺跡（小熊・広井　1994）、15世紀代の中道遺跡（駒形　1995）などがある（第13図）。

調査に至るまで　10月21日の夕刻、バックフォーで圃場の暗渠排水路を掘削中に、大量の古銭が発見された。直ちに工事を担当していた吉原組から、長岡市教育委員会（以下「市教委」）に通報があった。市教委は、古銭が発見された箇所を視察し、中世の備蓄銭を埋蔵した可能性が高い遺跡であることを確認した。そして、吉原組に発掘調査を行いたいので、発見箇所の工事を一時中断するように要望し、了解が得られた。それを受けて市教委では、10月23日に発掘調査を行うことを予定した。

調　査（10月21日～27日）　10月23日に、工事主体者の長岡市農業協同組合をはじめ、関係者（機関）に、古銭の発見に伴う必要な発掘調査を行うことを伝え、同意を得る。そして、調査に必要な機材を中道



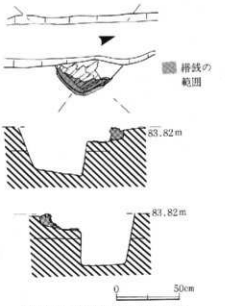
第12図　下道遺跡位置図及び中世遺跡群（1/50000、長岡）



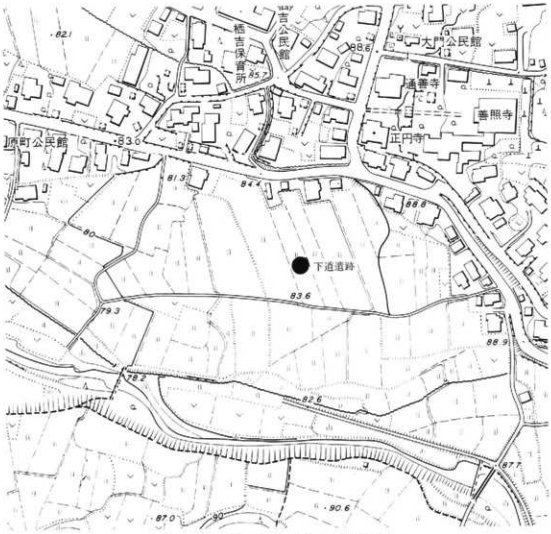
第13図　下道遺跡周辺の中世遺跡群（1/10000）

遺跡調査事務所から運び、工事担当の吉原組の協力を得て、下道遺跡の発掘調査に入る。発掘は、古銭が出土した地点の周辺約8㎡を、暗渠排水路の断面から確認した出土位置まで人力で掘り下げるとともに、暗渠排水路工事の排土や周囲に飛び散った古銭の発見に努める。次いで竹串を使って、古銭の埋蔵状況を調べ、木製容器に入っていたことを確認する。発掘は23日の夕刻まで続け、木製容器は翌24日に発掘した。木製容器は、周囲の土とともに取り上げ、ＰＥＧの溶液をハケで塗布する簡易処置を施している。そして、27日までに周辺で補足調査を行い、古銭の現場での調査を終える。

土層序（第14図）　古銭が発見された箇所は、40cmほどの水田耕作土の下が、地山の暗青灰色粘土層である。古銭を埋蔵した木製容器は、田面から約50cm下の暗青灰色粘土層中に掘り込まれていた。古銭が発見された地点の改良工事は盛土によるもので、これが破壊されずに残される結果となった。



第14図　備蓄銭遺構図（1/30）



第15図　下道遺跡周辺の地形図（1/2500）

遺　構（第14図）　古銭が埋蔵された木製容器のほかに遺構は検出されなかった。木製容器は、地山に掘り込まれていたが、木製容器を掘り込んだ掘り形は確認できなかった。木製容器の大きさは、暗渠排水路の工事で一部が欠損しているが、残存部から直径50cm、深さ約10cmほどと推定される。木製容器は、銅板に綴じた痕跡は見られないが、残存部の状況から曲物と考えられる。曲物の底は、厚さ約6㎜の板である。曲物の内部での古銭の状況は、最下面が南北、その上が東西に、方向を交互にしながら一列に並べて納められていた（第31図写真右下参照＝曲物の底板に付いた古銭の痕跡）。古銭が検出された状況ではバラバラになっていた部分もあるが、内部の状況から、古銭は緡銭（びんせん＝銭さしで貫いた銭）の状態で納められていたものと判断される。

遺　物（第16図～第30図）　曲物に納められていた古銭は、63種類（島銭を含む）、11,212枚に上る。重量は37.836kg。古銭の種別と数量は第1表の通りである。古銭の分類は、古銭の種類ごとに分け、加えて銭文の字体（真書、行書、篆書、隷書など）、背面の文字、背面の星・月等で細分類した。古銭の保存は極めて良好で銭文は判読しやすく、摩滅等で判読できないものは92枚に過ぎない。

出土古銭の最古銭は後漢の「五銖」（初鋳年　24年）、最新銭は元の「至大通寶」（初鋳年　1310年）で、そのうち、960年初鋳の「宋通元寶」から1119年初鋳の「宣和通寶」までの北宋と、初鋳年1127年の「建炎通寶」から1265年初鋳の「咸淳元寶」の南宋の、いわゆる宋銭が出土古銭の大半を占めている。

出土量の比較では、北宋の「皇宋通寶」の1,443枚と、同じ北宋の「元豊通寶」の1,305枚が出土量の1位、2位を占める。これは、全国各地出土の渡来銭の出土傾向（永井編　1994）と同じである。次いで多いのは、北宋の「熙寧元寶」1,039枚、北宋の「元祐通寶」1,034枚、唐の「開元通寶」951枚（845年の紀地銭を除く）で、この5種類の渡来銭が、出土古銭の中では圧倒的に多く、出土数の半数以上を占めている。中国渡来銭の他には、日本の皇朝十二銭の「隆平永寶」と「富壽神寶」、高麗の「東國通寶」と「海東通寶」が各1枚出土している。これまで「海東通寶」は、順読（時計回り読み）が知られているが、下道の「海東通寶」は上下左右と読む対読で、珍しい古銭である。また、公鋳銭とは製作が異なる、いわゆる島銭が混入していた。「淳化元寶」、「元宋（平）□寶」を模鋳した2種類である。

緡銭は、一般的に97枚を一緡とする例が多い。下道で緡銭の状態で取り上げた6本の緡銭の枚数（一緡の重量）は、95枚（315ｇ）、97枚（328ｇ）、112枚（397ｇ）、124枚（421ｇ）、145枚（487ｇ）、150枚（511ｇ）と、かなりのばらつきがある。曲物などの容器に銭を納める場合、一緡分と思われる箇所に切れ目もなく、長い緡にして埋納した可能性（平安京左京八条三坊七町）や、容器に埋納する場合に緡を解体したことなどが考えられている（永井編　1994）。下道の場合も、曲物に埋納する際に長い緡のままか、緡を解体した可能性が考えられる。しかし、銭を束ねた際の種類及び表裏の別などには、特に規則性は見いだせなかった。なお、銭を束ねる「緡」の材料は、慎重に発掘したが、部分的に紐状になった粘土を確認したにすぎない。緡の材料に稲藁が使われることが多いと言われており、下道の場合も、紐状の粘土が銭を貫いていることから、稲藁が緡に採用された可能性が高い。

下道で出土した古銭の枚数は、11,212枚、37.836kgである。一貫目3.8kgとした場合、下道で曲物に埋蔵されていた古銭は、約十貫文に相当する。中世の百文緡は、97枚が最も多いと言われている（永井編　1994）。これを下道に当てはめた場合は、約115.6緡になる。十緡を一貫文に換算すると十一貫以上になり、総重量で換算したときと一貫文以上の違いが生じる。下道で出土した一緡97枚の重量は328ｇであり、十緡を一貫文にするには重さが不足している。ちなみに下道で大量に出土した銭だけで一緡97枚の重量を計測すると、開元通寶（唐）は294ｇ、皇宋通寶は327ｇ、元豊通寶は341ｇと銭の種類によっても違いが見られる（いず

No.	銭貨名	国	初鋳	枚　数	備　考	No.	銭貨名	国	初鋳	枚　数	備　考
1	五銖	後漢	24	3		33	元祐通寶	北宋	1086	1034	
2	五銖	隋	581	1		34	紹聖元寶	北宋	1094	486	
3	開元通寶	唐	621	951		35	東國通寶	高麗	1097	1	
4	乾元重寶	唐	758	50		36	海東通寶	高麗	1097	1	対読
5	開元通寶	唐	845	49	紀地銭	37	元符通寶	北宋	1098	172	
6	天漢元寶	前蜀	917	1		38	聖宋元寶	北宋	1101	450	
7	光天元寶	前蜀	918	1		39	大観通寶	北宋	1107	153	
8	乾徳元寶	前蜀	919	3		40	政和通寶	北宋	1111	495	
9	周通元寶	後周	955	4		41	宣和通寶	北宋	1119	44	
10	唐國通寶	南唐	959	16		42	建炎通寶	南宋	1127	5	
11	開元通寶	南唐	960	7		43	紹興元寶	南宋	1131	9	折二銭
12	宋通元寶	北宋	960	36		44	正隆元寶	金	1157	17	
13	太平通寶	北宋	976	118		45	淳熙元寶	南宋	1174	66	
14	淳化元寶	北宋	990	105		46	紹熙元寶	南宋	1190	21	
15	至道元寶	北宋	995	192		47	慶元通寶	南宋	1195	20	
16	咸平元寶	北宋	998	166		48	嘉泰通寶	南宋	1201	18	
17	景徳元寶	北宋	1004	211		49	開禧通寶	南宋	1205	9	
18	祥符元寶	北宋	1009	249		50	嘉定通寶	南宋	1208	66	
19	祥符通寶	北宋	1009	147		51	大宋元寶	南宋	1225	4	
20	天禧通寶	北宋	1017	236		52	紹定通寶	南宋	1228	22	
21	天聖元寶	北宋	1023	573		53	端平元寶	南宋	1234	2	
22	明道元寶	北宋	1032	51		54	嘉熙通寶	南宋	1237	5	
23	景祐元寶	北宋	1034	153		55	淳祐元寶	南宋	1241	19	
24	皇宋通寶	北宋	1038	1443		56	皇宋元寶	南宋	1253	11	
25	至和元寶	北宋	1054	150		57	景定元寶	南宋	1260	18	
26	至和通寶	北宋	1054	41		58	咸淳元寶	南宋	1265	32	
27	嘉祐元寶	北宋	1056	123		59	至大通寶	元	1310	3	
28	嘉祐通寶	北宋	1056	269		60	隆平永寶	日本	796	1	
29	治平元寶	北宋	1064	204		61	富壽神寶	日本	818	1	
30	治平通寶	北宋	1064	36		62	島銭			1	淳化元寶
31	熙寧元寶	北宋	1068	1039		63	島銭			1	判読不能
32	元豊通寶	北宋	1078	1305			不明			92	
									総枚数	11,212	

第１表　下道遺跡出土備蓄銭種別一覧表

※「初鋳」は、その銭が最初に鋳造された西暦年。
島銭の備考欄には、模鋳した銭貨名（淳化元寶、判読不能は「元宋（平）□寶」）を記載した。
「不明」銭のうち、摩滅して字体の判読が不可能なもの84枚、破損しているもの８枚である。

れも三緡の平均値)。これは流通するうちに摩滅して貨幣が薄くなり、1枚の重さも減じたものと考えられ、一貫文にした重量で貨幣を流通する場合は、一緡を380g前後になるように枚数に関係なく貨幣を束ねたものと考えられる。そして、下道で曲物に埋蔵されていた銭は、97枚前後を一緡としていたのではなく、重量から十貫文が曲物に埋蔵されていたと見るほうがより妥当と思われる。このことから、下道で緡の状態で取り上げた緡銭を今一度見直すと、本来あった緡銭の状態でなく、銭を束ねていた稲藁が切れた状態であった可能性が指摘できる。

なお、十貫文という区切りのよい数字が得られたことは、調査でほぼすべての埋蔵されていた古銭を回収できたと思われる。

まとめ　南北に山裾が迫り、東に谷頭がある沢状の地形に、古銭を納めた木製容器の曲物が発見された。曲物が下道の調査で発見された唯一の遺構である。発掘調査は、工事がほぼ終了した水田で緊急に行ったため、面積が8㎡と少なく、周辺の他の遺構を発掘できなかった可能性が残る。だが、沢状の地形の中に位置する下道の付近には、地形上から建物を伴う遺跡が占地するに不適当であることや、十貫文相当の銭が緡銭の状態で曲物に納められて埋蔵されていた事実などから、下道の古銭は、将来に備えて蓄えておくための、いわゆる「備蓄銭」と思われる。

備蓄銭の埋蔵年代を推定する方法に、最新銭の初鋳年代から考えることが一般的である。下道のように「至大通寶」(初鋳年1310年)が最新銭の場合には、これまでに三案が示されている。是光吉基氏は14世紀後半(是光　1986年)、鈴木公雄氏は14世紀第2四半期(鈴木　1992年)、永井久美男氏は14世紀第3四半期中心(永井　1994)を示されている。これらの見解から、下道の備蓄銭は、14世紀半ばから後半にかけて埋蔵されたと考えられる。

ところで、栖吉地区において中世遺跡の発掘調査は、冒頭で述べた4遺跡で行われている。いずれも15世紀代の遺跡で、推定される下道の年代観より新しい。14世紀中ごろから後半にかけての栖吉では、普済寺の存在が14世紀半ばに知られ、15世紀初めには多く領地をもつ有力寺院になっていたことが、史料から窺える。普済寺が現在地に中興開山したのは16世紀前半で、それ以前は下道に近い大行寺遺跡などが旧「普済寺」の比定地と見られている。これらの情報から、14世紀中ごろから末には、普済寺と関連した勢力が栖吉にすでに存在し、その勢力が来るべき将来に備えておよそ十貫文もの銭を蓄えた可能性も考えられよう。今後、史料や遺跡等の調査を通じてさらに検討していきたい。

引用・参照文献

小熊博史・広井造・他　1994年　「松葉遺跡－中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う発掘調査－」長岡市教育委員会

駒形敏朗・他　1986年　「三貫梨遺跡－第1次発掘調査－」長岡市教育委員会

駒形敏朗　1987年　「三貫梨遺跡－第2次発掘調査－」長岡市教育委員会

駒形敏朗　1995年　「中道遺跡－第1次発掘調査概報－」長岡市教育委員会

是光吉基　1986年　「出土渡来銭の埋蔵年代」『出土渡来銭－中世－』

鈴木公雄　1992年　「出土備蓄銭と中世後期の銭貨流通」『史学』第61巻第3・4号

永井久美男編　1994年　「中世の出土銭－出土銭の調査と分類－」兵庫埋蔵銭調査会

永井久美男　1994年　「5．埋蔵時期の推定と最新銭」「中世の出土銭－出土銭の調査と分類－」兵庫埋蔵銭調査会

銭貨名	1 五銖(後漢)		2 五銖(隋)	3 開元通寶			
背 面						上月	下月
枚 数	2	1	1	206	444	186	35

銭貨名							
背 面	下月	左上月	上下月	左右月	左月	上星下月	下星
枚 数	31	8	5	1	10	1	1

銭貨名				4 乾元重寶			
背 面			不明			上月	下月
枚 数	2	1	20	30	8	1	7

銭貨名		5 開元通寶					
背 面	不明	昌	京	洛	益	越	藍
枚 数	4	6	2	5	2	2	2

第16図　下道遺跡出土古銭拓本図(1)

銭貨名							
背　面	兗	潤	開	梁	廣	？	梓
枚　数	2	8	1	1	3	1	1

銭貨名		6 天漢元寶	7 光天元寶	8 乾統元寶	9 周通元寶		
背　面	不明					上月	左月
枚　数	13	1	1	3	1	1	1

銭貨名		10 唐國通寶		11 開元通寶	12 宋通元寶		
背　面	右星		不明				
枚　数	1	14	2	7	2	24	6

銭貨名				13 太平通寶		14 淳化元寶	
背　面	下月	右上月	左月		左星		
枚　数	1	2	1	117	1	31	9

第17図　下道遺跡出土古銭拓本図(2)

銭貨名				15 至道元寶			
背　面							
枚　数	12	18	35	54	63	6	28

銭貨名			16 咸平元寶	17 景徳元寶			18 祥符元寶
背　面		不明				不明	
枚　数	40	1	166	127	83	1	60

銭貨名			19 祥符通寶				
背　面		不明					
枚　数	188	1	19	23	39	55	11

銭貨名	20 天禧通寶				21 天聖元寶		
背　面				不明			
枚　数	128	82	24	2	286	31	246

第18図　下道遺跡出土古銭拓本図(3)

銭貨名		22 明道元寶		23 景祐元寶			
背　面	不明						
枚　数	10	28	23	22	11	23	36

銭貨名		24 皇宋通寶					
背　面							
枚　数	61	10	159	56	29	174	321

銭貨名							
背　面							
枚　数	16	27	103	74	178	41	40

銭貨名			25 至和元寶				
背　面		不明					
枚　数	126	89	14	51	15	53	17

第19図　下道遺跡出土古銭拓本図(4)

銭貨名	26 至和通寶		27 嘉祐元寶				
背　面							
枚　数	26	15	5	9	47	19	15

銭貨名				28 嘉祐通寶			
背　面			不明				
枚　数	18	1	9	24	41	14	34

銭貨名						29 治平元寶	
背　面					不明		
枚　数	16	33	33	62	12	85	5

銭貨名			30 治平通寶				
背　面							
枚　数	110	4	10	6	5	5	10

第20図　下道遺跡出土古銭拓本図(5)

銭貨名	31 熙寧元寶						
背　面							
枚　数	233	124	3	7	14	9	3

銭貨名							
背　面							
枚　数	7	5	44	7	4	6	66

銭貨名							
背　面							
枚　数	13	46	6	17	41	98	160

銭貨名			32 元豊通寶				
背　面		不明					
枚　数	82	44	5	26	34	19	17

第21図　下道遺跡出土古銭拓本図(6)

銭貨名							
背　面							
枚　数	26	25	35	21	10	5	168

銭貨名							33 元始通寶
背　面						不明	
枚　数	231	362	174	27	11	109	53

銭貨名							
背　面							
枚　数	66	60	27	27	1	246	194

銭貨名							
背　面							
枚　数	40	25	91	17	19	18	15

第22図　下道遺跡出土古銭拓本図(7)

銭貨名							
背　面							
枚　数	9	2	8	4	16	8	8

銭貨名			34 紹聖元寶				
背　面	上星	不明					
枚　数	4	76	55	22	21	44	25

銭貨名							
背　面						上月	
枚　数	41	3	2	16	2	2	7

銭貨名							
背　面	上星	下星					
枚　数	1	1	33	3	14	10	9

第23図　下道遺跡出土古銭拓本図(8)

銭貨名							
背　面							
枚　数	7	18	39	24	20	7	1

銭貨名				35 東國通寶	36 海東通寶	37 元符通寶	
背　面	上月	下月	不明				
枚　数	1	2	56	1	1	13	50

銭貨名							
背　面							
枚　数	3	10	7	11	27	22	9

銭貨名				38 聖宋元寶			
背　面			不明				
枚　数	8	3	9	7	5	64	31

第24図　下道遺跡出土古銭拓本図(9)

銭貨名							
背　面							
枚　数	1	7	21	12	35	28	54

銭貨名							
背　面							
枚　数	4	37	10	24	2	4	11

銭貨名							39 大観通寶
背　面						不明	
枚　数	1	1	23	4	3	61	153

銭貨名	40 政和通寶						
背　面							
枚　数	3	2	1	2	62	45	31

第25図　下道遺跡出土古銭拓本図(10)

銭貨名							
背　面							
枚　数	4	2	25	47	4	8	5

銭貨名							
背　面							
枚　数	11	56	34	24	5	13	8

銭貨名							41 宣和通寶
背　面						不明	
枚　数	27	7	4	3	1	61	1

銭貨名							
背　面							
枚　数	13	1	1	4	2	5	4

第26図　下道遺跡出土古銭拓本図(11)

銭貨名						42 建炎通寶	43 紹興元寶
背　面					不明		
枚　数	3	6	1	1	2	5	9

銭貨名	44 正隆元寶	45 淳熙元寶					
背　面			上月下星	上月下星	上月下星	𠂤	𠂤
枚　数	17	3	12	13	3	7	5

銭貨名							46 紹熙元寶
背　面	十一	十二	十四	十五	十六	不明	元
枚　数	3	5	2	6	6	1	4

銭貨名					47 慶元通寶		
背　面	二	三	四	五	元	二	三
枚　数	5	5	4	3	3	7	1

第27図　下道遺跡出土古銭拓本図(12)

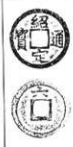
銭貨名			48 嘉泰通寶				49 開禧通寶
背　面	四	六	元	二	三	四	元
枚　数	7	2	3	6	5	4	4

銭貨名			50 嘉定通寶				
背　面	二	三	元	二	三	四	五
枚　数	2	3	5	5	3	1	4

銭貨名							
背　面	六	七	八	九	十	十一	十二
枚　数	6	7	2	5	5	6	9

銭貨名			51 大宋元寶		52 紹定通寶		
背　面	十三	不明	元	二	元	二	三
枚　数	5	3	2	2	3	4	7

第28図　下道遺跡出土古銭拓本図(13)

銭貨名				53 端平元寶	54 嘉熙通寶		
背　面	四	五	六	元	元	二	四
							
枚　数	3	3	2	2	2	1	2

銭貨名	55 淳祐元寶						
背　面	元	二	五	六	七	八	九
枚　数	3	6	2	1	1	2	2

銭貨名		56 皇宋元寶					57 景定元寶
背　面	十	元	二	四	五	六	元
枚　数	2	3	3	2	2	1	2

銭貨名					58 咸淳元寶		
背　面	二	三	五	不明	元	二	三
枚　数	4	8	3	1	4	19	4

第29図　下道遺跡出土古銭拓本図⑭

銭貨名				59 至大通寶	60 隆平永寶	61 富壽神寶	62 島銭 淳化元寶
背　面	四	六	七				
枚　数	1	2	2	3	1	1	1

銭貨名	63 島銭 判読不能						
背　面							
枚　数	1						

第30図　下道遺跡出土古銭拓本図(15)

※1　拓本図の縮尺は、1/1.5

2　拓本図の並び順は、渡来銭、日本の古銭、島銭の順。

3　渡来銭の各銭種ごとの並び順は、真書、行書、草書、隷書、篆書の順で、さらに背面の状況で分類して並べた。

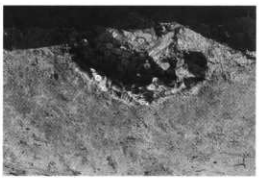
4　なお、各銭種の不明欄には、その銭種と判読できるが、書体等の分類が困難なものをまとめた。

中道遺跡から下道遺跡を望む

近景

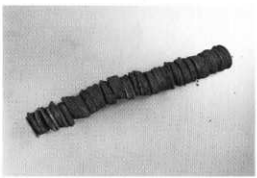
発掘調査

発掘風景（備蓄銭を発掘）

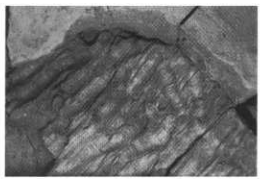


備蓄銭検出状況

曲物内の備蓄銭



さし銭



曲物（銭の痕跡）

第31図　下道遺跡発掘調査の写真

4　おわりに

平成７年度の市内遺跡発掘調査は、年度当初の陸砂利採取計画に伴う舞台Ｂ遺跡確認（試掘）調査に始まり、秋の収穫後に徳平遺跡の確認（試掘）調査、それに晩秋に入ってからの工事中に中世の古銭が大量に発見された下道遺跡の発掘調査で終わった。舞台Ｂ遺跡と徳平遺跡は、それぞれ計画地から遺跡が外れていることを確認し、事業者に本発掘調査の必要がない旨を口頭で伝えた。

下道遺跡は、水田の暗渠排水路の工事中に発見された遺跡で、工事関係者の協力で調査を行うことができた遺跡である。調査では曲物に収められて１万枚以上、十貫文におよぶ大量の銭が発見された。十貫文もの銭を誰が、いかなる目的をもって埋蔵（備蓄）したものかなどについては、今後の史料・考古学的調査にまつところが多い。下道が所在する栖吉地区は、これまで４カ所で中世遺跡の発掘調査が行われている。それも栖吉川を挟んで半径500ｍほどの狭い中である。これまでは、発掘調査を行った遺跡の評価は、その遺跡だけに限られることが多く、いわば点としての遺跡の評価付けであった。下道を含む栖吉地区の場合は、総合的に、かつ学際的に評価を考える時期に達したと思われる。また長岡の歴史に新たな１ページが書き記されることになった。改めて、関係各位の御協力に謝意を表したい。

長岡市教育委員会は、これからも諸開発に伴う確認調査等を行い、先祖が築いてきた遺跡としての文化財の保護に遺漏の無いように努めるつもりである。

調　査　体　制

調査主体者　長岡市教育委員会（教育長　大西厚生）
調査担当者　駒形敏朗・小林伸治（長岡市教育委員会生涯学習課）
調査事務局　長岡市教育委員会生涯学習課（課長　唐川清喜）
調査作業員　調査地地元民

調査に御指導・御協力をいただいた方々（機関）

長部三郎　小熊博史　広井　造　水沢美徳　株式会社吉原組　長岡市農業協同組合

長岡市内遺跡発掘調査報告書

－舞台Ｂ遺跡・徳平遺跡・下道遺跡－

平成８年３月28日印刷　　平成８年３月29日発行

発行：長岡市教育委員会　　印刷：株式会社　第一印刷所

報告書抄録

ふりがな	ながおかしないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	長岡市内遺跡発掘調査報告書
副書名	舞台遺跡・徳平遺跡・下道遺跡
巻次数	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	駒形敏朗・小林伸治
編集機関	長岡市教育委員会
所在地	〒940　新潟県長岡市幸町2－1－1　TEL　0258－39－2240
発行年月日	西暦　1996年3月29日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
舞台B遺跡	長岡市高島町字舞台39外	15202	376	37°22′39″	138°49′50″	19950411～0414	704	砂利採取
徳平遺跡	長岡市王番田町字徳平789外	15202	232	37°27′39″	138°47′38″	19951002～1006	246	圃場整備
下道遺跡	長岡市栖吉町字下道3259	15202	0	37°25′05″	138°54′00″	19951021～1027	8	暗渠工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
舞台B遺跡	遺物包含地	中世	なし	なし	調査地は遺跡から外れていた。
徳平遺跡	遺物包含地	古代	なし	なし	調査地は遺跡から外れていた。
下道遺跡	古銭出土地	中世	備蓄銭埋蔵容器	古銭（約11,212枚）（重量 37.836kg）	工事中の発見